

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2023年2月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：日本語教育のためのマルチモーダル・コミュニケーションの基礎的研究
—メディアを要素とした「場面」と「意識」の考察を中心に—

申請者氏名：柳 東ムン

主査 池上 摩希子

(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 小林 ミナ

(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 宮崎 里司

(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

<本論文の概要>

日本語教育においてコミュニケーションといったとき、言語を中心として捉えることが未だ主流といえる。しかし、当該論文はこの捉え方そのものを問題とし、マルチモーダル・コミュニケーションの観点でコミュニケーションの実態と意識をメディアという要素を含めて捉えなおしたものである。そして、その成果が日本語教育にどのような意義をもたらすかについて考察し、論じている。

申請論文は全 11 章で構成されている。序章から始まり、理論的研究（第 2 章、第 3 章）と実証的研究（第 4 章～第 7 章）から総合的考察（第 8 章～第 10 章）を経て結論章が置かれるといった構成である。

序論と位置づけられる第 1 章では研究の背景と目的、構成が述べられ、第 2 章で先行研究を検討している。ここでは、日本語教育と関連分野において行われたマルチモーダル・コミュニケーションに関する研究とメディアに関する研究がまとめられ、それらの研究成果と課題の整理を通して、この研究で注目する課題が導き出された。この研究で援用する理論的枠組みと日本語教育における位置づけを述べたのが第 3 章である。第 2 章で確認した先行研究を踏まえ、この研究を行うにあたり必要となる先行研究として、マルチモーダル談話分析、マルチモーダルな社会記号論、マルチモーダル相互行為分析、マクルーハン (McLuhan, M.) のメディア論があげられた。

第 4 章では、研究方法について述べられている。第 5 章から第 7 章では調査と分析、考察が行われるのであるが、これらの調査方法、分析の観点、そして選択した方法が日本語教育学の研究として果たせる意義について記述されている。各調査は異なるメディアが活用される 3 つの場面とそこで起きるコミュニケーションを設定して実施されている。第 5 章では、3 名での会話場면을対象とした調査と分析について述べられる。初対面の日本語話者 3 名が対面で会話を行う場면을調査し、どのような意識に基づいてマルチモーダルな行為を行ったか、対人印象や人間関係に関してはどのような意識を持っていたかについて明らかにした。第 6 章では、e ラーニングの受講場면을対象に、日本語話者が e ラーニングの形態で行われる講義動画を視聴する場면을調査し、そこでのマルチモーダルな行為と意識を明らかにした。第 7 章で取り上げた場面は、ソーシャルメディア上でコミュニケーションアプリ (LINE) を用いてやりとりを行う場面である。初対面の日本語話者 2 名が、一対一で LINE のチャットでコミュニケーションを行う場면을調査し、5 章、6 章と同様、マルチモーダルな行為と意識

がどのようなものであったかを明らかにした。各調査と分析から、日本語教育において何が求められるかといった考察も行われている。

第 8 章からは総合的考察に入る。第 8 章はマルチモーダルな行為の諸相について、第 9 章はそれに対するメディアの影響について、そして第 10 章では、ここまでの内容を日本語教育にどのように生かせるかについて、論じている。まず、第 8 章においては、第 5 章から第 7 章で扱った場面でマルチモーダルな行為がどのように現れたかという様相が比較され考察が行われた。一つひとつのマルチモーダル・コミュニケーションの実態と、その行為に関するメッセージの送り手・受け手の意識がどのようなものが述べられている。続けて、第 9 章では、各行為の出現にあたりメディアがどのように影響するかを明らかにすることが試みられており、メディアの影響下で行われるマルチモーダルな行為をどのように解釈しているかを明らかにする試みが展開される。第 10 章では、ここまでの実証的研究から日本語教育に対してどのような知見が提示できるかといった観点で考察を行い、①コースデザインのプロセスの検討、②コミュニケーション能力の捉え直し、③マルチモーダル文化の提示、④日本語教育・学習におけるメディアの位置づけ、の 4 点を示した。

ここまでの理論的研究、実証的研究、考察をまとめた結論として第 11 章が置かれている。第 11 章において、申請者は当該研究の日本語教育学における意義として、3 点を主張している。すなわち、マルチモーダルの観点からその具体的な実態を明らかにした点、複数のメディアによる様々なコミュニケーションの場면을調査しメディアがコミュニケーションにどう影響するかを明らかにした点、マルチモーダル・コミュニケーションとメディアをキーワードとしたコミュニケーションの研究が日本語教育にどのような意義があるかを提示した点である。最後に、今後の課題として残されたものをまとめて論が閉じられている。

<本論文の評価>

このように、従来、「言語以外の行為」への注目が十分ではなかった日本語教育のコミュニケーション研究を、1)マルチモーダルな行為とメディアの捉え方、2)メディアの活用についての理解、3)対人印象・人間関係の構築と維持、4)マルチモーダル文化といった観点から検証を試みた点は課題設定も含めて高く評価でき、日本語教育への貢献が期待できるものともいえる。

しかし、以下に述べるように、検討すべき課題も残されている。まず指摘されるのは、課題解決のための手続きに問題が残っていることである。一例として、先行研究の精査および理解が十分とはいえない点をあげる。「言語以外の部分までより広く視野に入れるマルチモーダルの観点」というのであれば、サックス(Sacks, H.)らの一連の研究も参考文献として取り上げ、言及してほしい。この点については、話し手の意識を見たかったことから言及していないという見解が得られたが、であれば、その理由も含めて引用し言及することによって、本論文の立ち位置をより明確にできていたはずであろう。その一方で、サックスらと同じ手法を用いている、岡田・柳町(2008)、高梨(2016)らの研究は参考文献としても取り上げられており文中での言及もあるので、こうした点では整合性をもたせて先行研究を精査する必要があるといえる。また、ある発話が皮肉になるか否かは表情によるといった記述も見られるが、表情(言語以外)を持ち出さずともグライス(Grice, P.)の理論で十分に解釈可能ではないかと考えられるので、こうした点でも先行研究を意識して考察を深めていってほしい。

もう一つは、結論として実践への落とし込みが論じられているが、それが十分とはいえない点である。申請論文では「ただし、実践におけるコースデザインの全体像を紹介して報告している研究は多くなく、マルチモーダルな行為全般を学習内容とする実践は、管見の及ぶ限り、見当たらない。(p.209)」とされているが、この点は再考する必要がある。「マルチモーダル」という用語は使われていないが、古くはプロジェクト・ワークといった名称で記述されている実践、細川英雄らによる「活動型授業」など、言語を言語以外から切り離さず、ホリスティックにとらえようとする実践は、日本語教育の領域に限ってみても少なくない。申請論文で言及されている実践とこうした先行する実践との関係を、日本語教育学の立場から論じてほしい。教育実践の現状に対する認識をより深め、実際に実践していくことは、マルチモーダル・コミュニケーションとメディアをキーワードとする研究全般における今後の課題であると考えられる。

そして、教師や学習者も、それぞれマルチモーダルの文化を持っていることを認識する必要があるとする申請者の主張は理解できるが、それが、待遇コミュニケーションの領域とどのような親和性があるのかについては、論旨の展開が十分になされていないようにも見受けられる。今後の発展研究課題として、学習者の能動的な相互参加(インターアクション)を取り入れた教授・学習法の総称であり、主体的、対話的、かつ深い学びをめざすアクティブラーニングと、どのような関連性があるのかへの関

心を高める必要がある。あわせて、「日本語教育にどう活かすべきか」を考察し、第三者とも共通理解がはかれるような専門用語を用いる工夫も必要ではないかと思われる。

<本論文の判定>

以上のように、当該論文には今後、引き続いての探求と検討が求められる課題が残されていることが指摘された。しかしながら、総じて、マルチモーダル・コミュニケーションを中心課題にメディアを研究の具体的な軸として据えた点、多様な分析データを抛りどころに検証を深めようとした点、そして、教育実践に対して示唆にとどめることなく意欲的な提案を試みた点、これらを評価し、本申請論文は日本語教育学の博士学位論文として認められるものと判断する。